

まえがき

いのちを預かる専門職として、少しでも患者さんの力になりたいと思う医師がいます。具体的には、適切な診断ができる力が欲しい、適切な治療が提供できる力が欲しいと願い、学習環境の整った研修病院で学びたいと希望します。経験豊富な医師のもと、患者さんを通して学ぶことは大切です。その一方で、積極的な治療が難しい患者さんを受け持ったとき、どのように声をかけ、これからの治療方針をたて、かわかってよいかわからない医師は少なくありません。

今までの教育は、問題解決志向で学んできました。医学部入学試験も、大学の進級試験も、医師国家試験も、そして専門医の資格試験も、すべての問題には正解があります。試験に受かるためには、正解を探すための勉強が欠かせません。研修医として、あるいは専攻医として適切な診断と治療の知識、経験、態度を学ぶことは大切です。ところが、いざ臨床の現場に立ち、患者さんを前にすると、どれほど正確な診断と治療を行っても、治療方法がないとわかった瞬間、どのように患者さんと向き合ってよいかわからなくなります。

たとえ病気を治すことができなかったとしても、患者さんと家族が穏やかで、幸せを実感できるようなかかわりができないでしょうか？

私は1994年からホスピス・緩和ケア領域で仕事をしてきました。30年以上、看取りにかかわるなかで培った対人援助のエッセンスを、研修医や専攻医、あるいはこれから在宅医療として看取りにかかわろうとする医師に伝えることを目的に本書を企画しました。

たとえ治療がなくなった患者さんであったとしても、1人の人間として、きちんと向き合い、援助ができる医師が1人でも増えていくこ

とを願っています。一部の緩和ケアの専門家しかできないかわりではなく、臨床経験を問わず誰でもかかわることができる援助です。本書を通して、あなたが提供できる患者さん・家族の援助として、力になれることを願っています。

2026年 8 月

めぐみ在宅クリニック 院長
エンドオブライフ・ケア協会 代表理事

小澤竹俊